

シベリア抑留記

愛知県 高木昇 一

って来た板で棺桶を作り、入れて、冬は雪が解けて穴が掘れるまで積んでおきます。初夏のころになると穴を掘って埋葬してました。私たちの収容所では二百人ほど亡くなったと聞いております。

この戦友たちは日本に帰ることができず、シベリアの凍った土の中で、懐かしい日本に早く帰りたといと今でも待っていると思いますと、今の私は本当にすまない気持ちでいっぱいです。

私は大正十四（一九二五）年九月春日井市味美西本町で生まれました。

大東亜戦争激戦の最中で、徴兵検査は繰り上げとなり十九歳で昭和十九（一九四四）年の徴兵検査を受けました。現役兵として入隊する「第一乙種」に合格。翌昭和二十年二月十日兵庫県加古川市の部隊に入隊しました。そして四日目に加古川市を出発、満州に向いました。もうそのころはアメリカの潜水艦が日本の近海をうようよとして、日本の船と見ると片っ端から魚雷を撃ち込んで沈めていたところでしたから、博多から朝鮮の釜山までの船はこれが最後になると言われ、それに乗船させられて釜山に着くまでは戦々恐々としていましたが無事上陸することができました。

そして満州へ、着いたところは北満の国境に近

い北安市の歩兵部隊でした。一期の検閲が済むと、七月に、より国境に真近の孫呉ソンゴの山の中にある、工兵隊陣地構築隊に転属になりました。与えられた任務は通信で、それも四数字を使つての暗号をつくる仕事でした。八月九日日ソ開戦、ソ連は飛行機と戦車で攻め込んできて、私達は散々な目に合い戦死者も多数出ました。終戦になってからも一カ月余り山の中におりました。

九月中旬にソ連側から、「いったんソ連のシベリアに入ってから日本に帰す」というので、孫呉を出るときは、日本に帰れると、背囊はいのうの代用品の背負袋（風呂敷包みをはすかいに背負うようなもの）に、ぎつしりと物を詰め込みました。工兵隊や歩兵隊の混成の千人の大隊が編成され歩いて出発しました。食べ物も充分になく、二日三日と経ちますと背負袋が重くて仕方がなくなる。袋の中のものをお次々と捨てて、ついには背負袋も捨てて、歩きとおしました。当然のこと落伍者も出ますがどうすることもできず、そのまま置き去りにして

歩きました。半月ほど、ふらふらになって国境の町 黒河に着きました。もうそのときの持ち物は水筒と空の雑囊ざいのう（布製の紐がついていて肩から掛ける袋）だけになっていました。それほどに歩き通しはつらいものでした。ソ満国境には黒竜江という大河が流れています。船で渡り、また歩きで対岸のブラゴエシチエンスクの街を通り過ぎました。日本へは帰さないということが分かってきたので、疲労は極端に重なり、落伍者もほとんど出たようです。ブラゴエシチエンスクの街から奥へ五十キロほどの国営農場（コルホーズ）に十月の初めに着きました。

シベリアでは十月といえは冬です。私達は鉄条網に囲まれ四隅の角の監視塔には、ソ連の兵隊がマンドリン銃（小型の銃で七十二発の弾の入ったマンドリンの形をした自動小銃）を抱えて監視しています。その中で家屋もなくテントで寝起きしました。寒くて寝られない夜もありました。

作業は道路造りと、ジャガイモ掘りなどでした。

農夫は人の良さそうでジャガイモなどくれましたので空腹は余り感じませんでした。農場の取り入れも終わった十二月、国営農場から遠くないライチハという収容所に移動させられました。この私達の家は半地下式になっていて、家の中の真ん中は通路でペーチカが一つ置いてあり、電灯も薄暗いものが一つぶら下がって通路を挟んで両側は板敷きとなりました。

作業は石炭掘りの重労働です。露天掘りで、土を二メートルくらい掘り下げると厚さ二、三メートルの石炭の層が現れます。それを掘り出すのですが、僅かの黒パンと乾燥野菜が一切れか二切れ入った塩味のスープだけでは仕事もできません。私達はボタといっていました。石炭層の上に二十センチほどの茶色の層があります。その茶色をした粘土のような物を焼きますと、まるでビスケットを食うようで香ばしく、いつも空腹の足しにしました。シラミと南京虫にはずうつと悩まされ続けました。取つても取つてもきりがありません。

石炭の粉で身体も衣服も真っ黒ですが、着たきり雀ですから洗濯もできません。ましてや炭鉱地帯ですから水はよそから馬車で運ばなければならぬ貴重品です。したがって入浴は三カ月か半年に一度で、石を焼いて水をかけるサウナ式です。垢と石炭の粉で黒くざらざらした肌をこすって落し、手桶に一杯の湯か水で身体を洗い流します。日本でいう、入浴で疲れを癒すなんてことは夢のまた夢でした。

私の炭鉱での仕事は、発破を仕掛ける穴掘りでした。機械はアメリカ製の大きなものが入っていて驚いた記憶があります。とにかくほとんどの者が栄養失調かそれに近い状態で、酷寒といわれる寒さの中でノルマの達成にこき使われました。ある日のことでした。石炭を運ぶ引込み線のそばを皆と歩いているとき、列車が入ってきました。すると一人の戦友が貨物列車めがけて飛び込み自殺をしたのです。

ソ連側から、来月は東京ダモイだと聞かされ喜

んだのも束の間、それが嘘で、その嘘を何度聞かされたことだろう。自殺した戦友は毎日明けてもくれてもぼろを着て、寒さの中、空腹抱えての重労働。それにいつ日本に帰ることができるか分からぬままに、精も根も尽き果て絶望して死を自ら求めたと思いました。それだから私はその後線路際を歩くのをとめて止めました。あの線路に自分の体が引き込まれそうな感覚に陥るからです。

安否を報せる術もなく、故郷恋しと東の空を眺めて思いをばせていました。がただ一度、赤十字のハガキが渡され便りを出すことができました。復員したとき母が私の出した手紙を見せて、心配していたぞよと聞かせてくれました。

昭和二十三年七月ごろ、また「東京ダモイだ」と言ってきました。また今度も嘘だろうとは思いますが、藁をも掴む思いでいましたところ、八月に入ると「東京ダモイだ、出発だ」と、またどこかの収容所送りかと、半信半疑で貨物列車に乗りました。列車はシベリア鉄道を東に向かって走

ります。ナホトカの港が、日本海が見えました。私も皆と一緒に万歳と涙を流しながら叫び続けました。港で待つこと三日。日の丸の旗をひらめかせながら興安丸が入港してきました。喜び勇んで船のタラップを上りながら、私の目には涙が光っているのを覚えました。

一日半かけて舞鶴港に上陸したのは、昭和二十三年八月二十三日のことでした。

軍隊生活半年。抑留生活三年。長い長い年月に思われました。いろいろなことを思い出しながら、よくぞ帰れたものと、戦友たちと共々喜びあいましたことは、終生忘れることはないと思います。戦争の悲惨さは内地も同じだったとは思いますが、戦後シベリアで厳寒の中飢餓に耐え重労働にも耐えた経験は、二度とこのようなことが起こらない日が続くことを祈るばかりです。

帰国してから郵便局に復職し、定年後はドコモに八年八カ月勤めて退職。その後は地元の区長や町内会長、神社の氏子総代などをして、現在も少

しばかりの役を受けて日々頑張っております。

(注) 高木氏は財団法人 全国強制抑留者協会
愛知県支部の創立以来、シベリア抑留の展示会・
シベリアの労苦を語り継ぐ集い、愛知県シベリア
死没者慰霊祭等にも積極的に参加、活動をされ、
またこの度の「愛知県シベリア抑留者祈念碑建立」
についてもご協力を頂いています。

シベリア抑留記

愛知県 奥田元三

私は大正十三（一九二四）年一月三日 父が医師をしていた開業先の静岡県島田市で生まれました。二歳になったとき本籍地である愛知県名古屋市中川区に戻り、以後現在に至っております。

昭和十八年（一九四三）徴兵検査を受け、翌年の二月に現役兵として九州の福岡市長公舎に集合し、四日後の二月二十三日博多港を出港。朝鮮の釜山から列車に乗り満州国ハイラルに着きました。そこから凍土をサクサク踏みしめて、関東軍第八国境守備隊に入隊しました。一期の検閲の後幹部候補生としての教育をチチハルで受けました。翌二十年七月に教育を終わり原隊復帰をしました。階級は見習士官で、八月十五日の終戦を迎えました。

ソ連軍の命令で八月二十日ごろ、山を下りてチ